

これからの世界・社会に立ち向かう 日本の夢（ビジョン）

第二期自啓共創塾

塾生・最終レポート

附・伴走者レポート

令和4年12月16日

一般社団法人

世界のための日本のこころセンター

塾生の最終レポート「これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）」

原則 15 歳から 50 歳までの多世代で、また職業や属性も多岐にわたり、さらに居住場所も日本全国、海外に及ぶ 38 名の塾生が集い、学び合った結果の、各人の最終レポートです。

塾生	年齢	所属	役職
1	49	社会保険労務士法	パートナー
2	61	企業	北米法人社長・地域統括
3	50	企業	グループ長
4	38	企業	課長
5	49	企業	コンサルタント
6	21	大学生・環境活動家	大学休学中
7	58	企業	
8	40	企業	課長
9	53	公正取引協議会	事務局長
10	24	企業	
11	34	企業	IT戦略課シニアアソシエイト
12	33	企業(フィリピン在	
13	41	県庁地域環境室	係長
14	37	企業	
15	23	大学院工学系研究	1年
16	65	企業	代表取締役
17	51	企業	代表取締役
18	32	市役所	主事
19	43	企業	代表取締役
20	33	企業	
21	47	県庁東京事務所	課長
22	32	県警察交通指導課	課長
23	51	企業	
24	38	市教育委員会	
25	33	町役場	主査
26	49	企業	担当部長
27	18	大学生	1年生
28	42	企業	担当課長
29	42	企業	課長
30	23	企業	取締役
31	24	一般社団法人	
32	43	企業	
33	28	企業	
34	25	企業	
35	18	大学受験浪人中	
36	25	企業	
37	26	一般社団法人	
38	59	企業	社長

1. 大橋真由美

今自分がいる場所から見える世界には、部分観の二元論ばかりが目につく。部分観で解決することであればよいが、時はすでにそれでは解決しないことが山積しているようにも感じられる。目的がないわけではないが、枝葉末節にばかりが独り歩きしていて、情報を発する側も、情報を得る側も、共に『義務だ、権利だ』『損だ、得だ』は声高く意見を発すれども、それは常に偏っていて、本質的な部分を全体観で裏観・表観という見方でものを見、意見をいう人にお目にかかることは非常に少ないと感じている。今自身が携わっている仕事は人と法律制度に関わることであるため、法律的にどうなのか？制度的にどうなのか？を相談ごととして問われることも多いが、同様である。さらに現実問題として人の問題が法律や制度で解決できることは多くはない。法治国家なので法は守るべきものであることは当然に前提として持つてはいるが、そもそもその法律が何のためにできたのか、本来その目的とするところは何か？もっと言えば、法律以前に考える必要がある。より本質的な部分である徳治や礼治をもっと伝え、お一人お一人が自分の頭で考え、自分が何を必要があるのかを選択していける力をつけることは、これからの時代とても必要とされると思う。その力を培うためにも、日本のこころ・リベラルアーツの学びは非常に重要であるように考えられる。

それらを踏まえ、自身のできることは何なのかと考えた時、安維に法律や制度で本質を隠すような回答は控え、法律制度の説明と併せ、その問題の本質はどこにあるのか？を自分にも相手にも問い続けることと、いま相手に見えている世界の視点を変えて伝えたり、そこから自身も相手も何か気づきを得ていけるように、地道にやっていくことではないかと思う。その為には、今後も自身がリベラルアーツに触れ、学び続ける必要性をさらに感じている。そして、共に歩める仲間を増やせるようにしていきたい。

2. 池野昌宏

今後の世界が求むる物を日本の心が遍くカバー → ビジネスで実装し世界を具体的に良くしていく

時代の要請が物質的充足から精神的充足に変化してきており、ビジネスの役割も変化してきている。いままでビジネスは、経済合理性の追求により物質的貧困を失くすという使命を主に担ってきており、これにより世界は飛躍的に物質的に豊かになり、食うに困る人が激減した。今、格差拡大や地球環境、生物多様性といった問題が重大化し、またスローダウンする経済に加え、「限界利益0社会」のようなビジョンが湧出する中、ビジネスの新たな使命の定義が必要となっている。ビジネスにヒューマニティの回復／拡大という新たな役割を担わせて、人の本質である善性や相互依存性が発揮され、各人が自己実現を行えるような、精神的充足に満ちた次のステージの世界へと変革していく必要がある。

生物の宿命として、「個体の保全」と「種の繁栄」と二つの命題の中でバランスを取りながら人は活動するが、今までの世界の主流の西洋的アプローチでは、自我の目覚めがまずあり、その欲求を満たすべく個の尊重といった形で理性と智は発展してきた。これは個の生存（食／物質の充足）が必須命題であったこれまでの時代の要請にもかかってきた。生存問題がかなり改善されてきた今、全体調和／種の繁栄がより大切になってきており、人類種としてのあり様や世界全体の舵取り、人のみならず他生命や地球環境も含めて、どう全体を存続させ良くしていくかに焦点を充てた意識の変化と行動が今求められる。極座標的からデカルト座標的な世界観への移行加速や、「我思う我と、我ありと認識する我は別」とサルトルが言うように自分をも含めて客観的にみる俯瞰の目で、自分と他者（人、生物、物）を同じ視点で認識し、全体を調和・発展させていくということが鍵となる。

全体調和への道で重要なことは、①多様性尊重、②関係性重視、③理性と精神の統合智の3つ。いきなり全

体調和のみで進むのではなく、個の尊重という One Step を入れたことで、人類種全体の持つ多様性が拡大し、これを認め合い統合していくやり方で、種全体としてのレジリエンスは上がっている。また、最新物理学が示唆する観測性・相関性・非局在化の問題があり、物体個々には実在・属性がなく、場に案在する粒子同士の干渉結果として物体は表出する。つまり関係性によってのみ実体を持つ。加えて、人はこれまで理性の力でこの世を理解し世界観を打ち立て進歩してきたが、昨今では理性が宿る意識領域ではカバーできない無意識領域の重要性が脚光を浴びている。NLP ニューロロジカルレベルのピラミッド頂点の上側部分、ユング心理学の集合的無意識、仏教の阿頼耶識など。人の能力の 70% を占める無意識部分を深く掘り、無意識・精神に関する探究と活用が益々重要となる。安易な蒙昧主義に負けることなく、理性と精神の両アプローチの統合を行い、結果として統合智の獲得・フル活用を行う。

上記の重要 3 点を踏まえた全体調和へのシフトという大きな流れの中で、日本の心がこういう重要ファクターを遍く押さえている。縄文アミニズムから繋がる森羅万象への崇拜、八百万の神への多様性尊重、諸対立に関する包摂、和の精神、近代以降も京都学派における「内と外」の同一視、またこれらの世界観とも関係する利他の心や慈悲の心等々。「こんにちは」に表される他者に内在する太陽神への信仰・尊敬とそれに基づく全体世界観や、個々が持つ「清明心」という自我意識と行動規範（精神・理性・行動の統合智）が、日本の心の全体と個に関する特長を端的に物語っている。

最後に大事なことは、我々は未来に向けてのこういう新たな考え方や意識変容の重要性と、それに関する日本の心の活用の利点を、単なるコンセプトに留まるのではなく、実社会や生活に実装していかねばならない。それも日本に閉じるのではなくグローバルに。この為、ビジネスという人間が創り出した最高の「価値創造・循環・拡大」システムにこのコンセプトをのせて、求めるべき姿やあり様をこの世で実際に具現化し広めていきたいと思えます。

3. 酒井宏忠

私が考えるこれからの日本の姿は、一言で言えば、強い倫理観と高い志を有する普通の市民の集合体です。普通の市民としたところが要諦で、一握りの富裕層が突出して知識を蓄え、いわゆるノブレスオブリージュを負う社会ではなく、日本中、どこに行っても誰と会ってもその人が倫理と志を備えている、それが大事です。そのためには、日本社会のあちこちの様々な分野で人間を底上げする取り組みが求められると思われれます。日本人が長らく培ってきた価値観や手法が役立ちます。例としては、二宮尊徳や弟子が体系化した、至誠、勤労、分度、推譲の四つの観点は、農業に限らず有効な場面が多い気がします。

私自身、様々な分野のうちで一つ何を実践するか自分に問うた結果、勤務先の仕事から思い切って切り離し、趣味を発展させることにしました。来年から未来を担う子供たち向けのスポーツと心の教育の組み合わせとしてスキーを、またその機会を活用して日本が育んだ価値観を伝えられる場を持つようにします。勤務先の副業制度を使い、私でも迎えてくれるスキー場が見つかったのでスキーのインストラクターになります。技術を教える際に(ちなみに正式な資格がまだないため当初は手伝い)、スキーではゴンドラやリフト上で子供と話す時間が長いことを利用し、(少し無理矢理な感じもしますが、嫌がられない程度に…)日本の自然の豊かさや日本や世界の偉人たちの歴史を伝え、スキーと冬の厳しさから、心身の鍛錬の大事さなどを、伝えていきたいと思えます。将来は、同志を募り資力や家庭的な限界のある子供にスキーを体験してもらえそうな仕組みを作り、社会全体の底上げに一角から取り組もうと思つています。スキーはもともと資力に余裕のある人向けのスポーツとして発展してきました。そのままでは、社会を底上げする私の目論見とは真逆なため、新たな視点

で考えを練っていきたいと考えます。一月に個人事務所の酒井事務所を設立し、そこを母体にして、当面は見た目は普通のフリーランスのインストラクターですが、将来に向けて志を持って一步を踏み出すようにします。

4. 大久保 慶一

1. 目指すべき世の中/日本のこころの貢献：

世界人口の増大に伴う資源獲得競争/戦争、自国ファースト/自利・利己主義に伴う貧富の差の拡大、便利さを追求した結果の地球環境悪化等、多くの危機が着実に増大している現代において、私たち子孫の時代がより厳しい時代になるとの危機感を覚えている。そのような現状を鑑み、全ての人類が安心して、安全に、豊かに/幸せに暮らせる世界を構築/次の世界につなげていきたいと考える。

人類は有史以来、上記背景を基に食/安全/自国ファースト/自利・自己主義実現の為に争いを繰り返し、環境を破壊し続けているが、技術/科学の発展に伴い食/安全に関してはある程度の解決策を有しており（解決策はあるが、実行されない地域有）、残りは自国ファースト/自利・自己主義に起因するところが多いと感じる。その為、目指す世の中を実現する為に個々人の思想/価値観の教育が大切であると考え（小我を超えて大我/真我を希求し、世界・人類の全体最適を目指すこころの育成）。

個々人の思想/価値観を教育するに当たり、『日本のこころ』から①自然に感謝し共に生きる日本的霊性、②他社を否定せず、良いところを取り入れる習合の精神、③自利・利己主義を戒め和を重んじる価値観等を広めていくことで、人類が次のステージに進化する手助けができると信じている。

2. これから、または、将来取り組んでみたいこと：

先ずは自分自身が日本のこころをより深く理解する必要性を感じている為、古神道、仏教、日本の儒教、古典、文学等をしっかりと学びたいと考えている。その中で学んだことを先ずは家族、周りの方々と共有しながら更に理解を深め、将来的には学んだ内容を広く人種・世代関係なく広めていくことで、目指すべき世の中に近くお手伝いをさせて頂きたいと考えている。

5. 徳田治子

2020年以降コロナのパンデミックにより、各国でデジタル化を加速し、中国はロックダウン、ロシアとウクライナの冷戦時代の影響により各国でエネルギーや食糧不足が勃発、欧米を中心に発展してきた資本主義経済が失速、と世界情勢がやや不安定になりつつある。

こうした中で、100年、200年と永続的に地球で人々が安心して幸せに暮らせる社会の実現、すなわちサステイナブルな世界が、これまで以上に求められる。

これから先求められるリーダーは、サステイナビリティな社会の実現に向けて世界各国が協力してそのサステイナブルな世界を実現できるよう、各国間を調整し、ゴールへ導く人であろう。

そこに、日本のこころである自然中心主義の中、「和をもって尊しとなす」「中庸のリーダー」のあり方が貢献できると思う。

私は現在、日本企業の製造業の経営者や、幹部に向けてエグゼクティブコーチングや、リーダーシップ研修など支援する仕事をしている。今後は自啓共創塾の日本のこころの学びを活かし、日本発グローバルでリーダーシップを発揮できる未来の中庸のリーダーを育成する、研修やコーチングを企画し、取り組んでいきたいと思う。

7. 鈴木聡子

問題意識

私は会社に入社以来のほとんどの業務が海外営業であることから日頃から英語を使って仕事をしており、また英文科出身ゆえに言語とは文化背景を知って初めて話せるものだという思いを持っているだけに、自ずと英語圏文化と日本語文化がよい意味で対峙する日常の中で自己主張の在り方に常々疑問を持っていました。つまり、お互いに常に主語「I」の主張をする英語と「相手話者」の主張に対して自分の考えはどうかという形で対話する日本語との違いを受容・理解しながら仕事をしています。個人という存在を重視するという価値観が日本人にはないと長く言われ、もっと自己主張をしなければならないと言われてきました。しかしやたら自己主張をすることは本当に正しいことなのか？日本人は本当に自己主張が苦手なのか？日本人の言動は世界で認められないことなのか？日本人の良さとは何なのか？せっかく日本人として生まれ育っているのだから日本の良さをしっかり認識して生きていくことが大切ではないかと考えています。

日本のころはどうか貢献できると考えるか

私たちの今はやはり先人達から脈々と流れてきている何か土台になっていること、その何か、が、日本のころだと思うが、そのことを自啓共創塾で再認識を超える実践的な知識として学ぶことができた。日本人は自信が持てないわけではないとしてもその自信を前に伝えることがどうも苦手なのか？しかし、長い歴史の中で培われてきた思想、自然との共存、空間・視覚・聴力的な認知能力からは世界に誇るものであることをもっと広く日本人に認識してほしいとあらためて思った。今年（2022年）だけではないが、サッカーW杯での日本人観客の試合後のふるまい、選手たちが去ったあとのロッカールームのありよう、監督がピッチに深く礼をして去っていく姿、どれも世界から絶賛された日本人のころの表れそのものだと思う。畳の部屋に布団を敷けば寝室、ちゃぶ台を置けば食事室という工夫。もったいない精神はSDGsが提唱される前から持っている考え方。今一度地球が長く存続し人々が平和を享受して生きていくために、日本のころを多くの日本人が再認識、日本人一人ひとりがその言動によって世界の人々に伝えていくことが世界への貢献だと思う。

自分がこれから、または、将来取り組んでみたいこと

私は企業人としての役割を終えたあとは、英語をとりこぼしてしまった大人たち、受験目的ではない子供たち、に英語は道具ではなくて文化背景を学んでこそ面白いということを伝えていく役割を担いたいと考えている。その中で英語との対比として日本語の文化背景も同時に伝えていき、国際社会に生きる自分たちが、日本のころを理解することが大切だということをきちんと話せるようになっていきたいと考えている。

8. 宍戸和行

(1)これから先どのような世の中にしたいか。そこに日本のころはどうか貢献できると考えるか。

- ・この先の世の中、個人が競争するばかりでなく、個人が助け合う世の中にしたい。助け合うといっても単に困っている人を助け合うという意味ではなく、それぞれの持つ特性やスキル、ノウハウを活かした助け合い。助け合うことで新たな価値が生まれたり、意味が生まれたりする、そんな発展的な助け合いの世の中にしたい。
- ・縄文の時代から江戸時代まで、日本的な社会性、自然の豊かさから持たされた我々にしかない完成を改めて理解することができた。この日本人の感性に誇りを持っているし、その感性が世界に通用するものだと

考えられるようになった。GAFAM と呼ばれるビッグテックが世界を席卷しているなかで、この日本人の感性は世界に飲み込まれないように持ち続けていかなければならないものだと思う。

(2) そのために、自分がこれから、または、将来取り組んでみたいこと。

- ・自分がこれから取り組んでみたいことは、この日本的な感性の大切さを後輩たちに感じさせる育成をしていきたいのと、自分が人と人とを結びつける活動をしていきたいことの2つです。単純作業をしていれば、経済が成長する時代は終わりを迎え、個人の活動としても同じことが言える社会になった。一人一人が価値のあるものとして、認められるべき時代になり、一人一人が幅広くスキルを発揮できる社会になっていくと思う。そうした一人一人の価値を最大限発揮できて、人として活躍を感じられる社会にしていきたい。
- ・また、個人的には、AI が活躍する時代を見据えた「人」がやるべき仕事について、新たな時代の「人」の役割を考え続けていきたい。テクノロジーは人の生活を便利にしてくれると言われるが、テクノロジーに合わせて苦勞する側面も持つ。ただ、人は自分の行動に意味を持つことを大切にし、その意味付けで人は動くと思う。そうした意味を考えることが日本人としての感性だと思うし、単なる合理主義ではない時代に、日本人として、共感を大切にしたい意味づけを大切にしたいし、実践していきたい。

9. 山本美穂子 「これからの自分について」

まず心からの感謝を申し上げます。5月より本講座を受講することができましたこと、これからの自分がどうあるべきか悩んでおりました私にとってとても重要な学びと気づきの場を得ることができました。また討議と意見交換の時間を共にした受講生の皆様との出会いにも感謝でございます。

「どのような世の中にしたいか」と「自分はどうなりたいのか」を今回の一連の学びのなかで相対化してかなり整理できたと実感しています。

ともすれば「他責的」に「こんな世の中だったらいいのに」と思いがちだった自身の思考を、「自分」を起点とするよう意識づけるよう心がけるようになりました。

自然に身につくまでにはしばらく時間がかかるとは思いますが、まずは型から入ってみることが私自身には向いている、ということも今回の学びの中で認識し、それについて自信がもてたことは非常にありがたいです。

型から入ることの良さについてはいくつかの講義の中でお話いただきましたが、その一方でデメリットとして「型を破れなくて停滞する」という一面も持っています。思想の歴史と過去の日本の歴史を学ぶことで「型破り」を許す、社会の寛容さが常に存在するよう、世の中を整えるのが大人の役目であると考えます。

私自身は次世代リーダーというよりは既にリーダー的な立場にいますので、世の中を整える側に、今まさに立っており、その立場の責任を果たしていくべきだと思います。

「責任を果たす」というと悲壮感が漂いますので、あまり堅苦しく考えず、まずは自分の手に届く範囲で取り組めることを実施していきます。以下に取り組むことを宣言したいと思います。

1. 家族と友人を大事にすること
2. 自啓共創塾で知りえた古典や歴史について継続して学び続けること
3. (当たり前のことですが) まずは社会人として自身の業務に取り組み、組織に貢献する
4. 傾聴と対話を基本としたコミュニケーション実践する。

これらに取り組むことで「軸をもつ」人間として成長し続けていきたいと思っています。

12. 杉浦佑子

地球上の生きとし生けるものが幸福を感じ、世界が平和であるために、私たちは原点に戻る必要があるように感じている。民族性や環境の違いはあれど、人類全員が地球市民であるという視点で考えれば、自然と調和していた暮らしに立ち返ることはとても重要だと考える。本塾で、縄文時代や古神道の起源について学び、その考えが確信に変わった。

フィリピン・カオハガン島に暮らし始めて9年目になるが、住めば住むほど、自然と共に生きるということの本当の意味が分かってきた。自然をうまく生かした暮らし方もそうだが、自然と共に生きることを深く知っているからこそその人としてのあり方が、私は世界に大きなヒントを投げかけているように感じている。

カオハガン島を訪れる方がときどき口にするのが、「懐かしい」という言葉だ。日本の最先端の企業を率いる経営者のグループが島に来て、世界の未来がここにある、とおっしゃっていたこともある。これまでの経済至上主義の中では、カオハガン島は最後尾にいるのかもしれないが、これまでの世界のあり方に限界が見えている今、自然と共にあるカオハガン島のあり方は、世界の最先端と言えるのかもしれない。

私がカオハガン島で得た学びは挙げたらきりが無いが、その中でも重要な意味を持つと考えているのが、「誰も取り残さない」という意識だ。本塾の学びの中で、日本のこころの根底にも、同じ意識があることが分かった。しかし、カオハガン島の人々は、この「誰も」の中に、自分が含まれているのだが、現代の日本人は、子どもたちの自己肯定感の低さに象徴されるように、自分が取り残されてしまっているのではないかと感じることもある。本塾の中で、利他主義の「利他」の中には、自分も含まれると学び、とても納得がいった。カオハガン島の人たちは、自然に生かされていることを深く理解し、自然への感謝、畏敬の念を持ちながら、経済的・物質的には豊かではなくても、今自分に「ある」ものに気づき、「足るを知る」生活を送っている。人生を豊かに生きるために必要なものはすでに自分の中にあると知っていて、満たされているからこそ、自分の周りにいる人が取り残されないようにと意識を配ることができるのだ。

自然と調和したところを土台に築き上げられてきた日本の精神を、改めて日本人一人ひとりが見直し、自分に思いやりを持ち、己のあり方を磨き、さらに他者に気を配ることが、地球上の生きとし生けるものの幸福、世界の平和に果たす役割はとても大きいだろう。

私はカオハガン島で日本を中心とした世界の方をお迎えし、インタープリターの役割を果たしていきたい。日本人が、島で「懐かしい」と感じるのはなぜなのか？カオハガン島と同じ暮らしはできなくても、人やコミュニティのあり方、自然と調和した感覚、他者を思いやる心など、自分たちの日常に持ち帰ることができるヒントはきっとたくさんある。本塾での学びが、そんな「懐かしさ」を深掘りさせてくれた。同時に、島にはない「日本のこころ」も学んだ。まずは、私自身がもっと日本のこころについて学び、出逢う人々と話題にしていくこと、そして、島で育っている我が子たちに、日本のこころを伝えていくこと。自然と調和した暮らしを送る我が子たちが、日本のこころをどう理解し、どんな未来を創っていくのか、人々にどんな影響を与えていくのか、私の楽しみのひとつでもある。

13. 福田 剛

○試みたいこと

- ・技術で遅れない。自分自身がAIを学び、職場のリスキングの先鞭をつける。AIで余暇を増やし多くの人々がわが国の文化に親しみ文芸復興する下地をつくる。
- ・やまとことばの使用。和のリズムをつくる。

○いろいろなものが混ざり合う日本の文化

- ・自啓共創塾の学びの中で神道、儒教、仏教などが混ざりあって一緒にあるというわが国の感覚は世界的には珍しいのではないかというのは一つの気づきでした。そしてその起源は縄文時代にまで遡り、アニミズムや清らかなものへの感性は古神道に受け継がれて今に生きており、世界的に見れば比較的大らかな文化が育まれてきたことも学びました。

○日本語で性格が丸くなる。やまとことばの使用。

- ・外国人の方の日本語が上達すると性格が温和になるという話は、特に印象に残りました。話題提供の外国人の先生の和歌の読み方や間の取り方は現代のせわしないトークと対極をなしており、やまとことばは和の基ではないかと思いました。十七条憲法の第一に和を貴ぶことが挙げられていることも、やまとことばが培った感性によるものと思います。

○それでも戦争があった

- ・日本のこころの素晴らしさを学びながらも、昭和の戦争について、往時の人々は現代よりも日本のこころに通じていたかと思うのですが、なぜ敗戦を向かえる事態になったか気にかかっています。今時点の私の見解として、一つは兵器製造に必要な重工業化の遅れによる焦り、もう一つは戦争遂行に向けた価値観の一本化ではないかと思います。
- ・産業の領域で世界に遅れをとること、焦りの裏返しで何かよりどころとなる価値観・標語に一丸となってしまうこと。これらは平和に対するリスクではないかと思います。

○平和に少しでも貢献するために、次のことに取り組みたい

- ・AI は時代の潮流で今後ますます広がると見込まれます。AI は業務の自動化を進めることに役立ちますが、いかに学習させるかはそれぞれの状況によるところがあり、日頃直面している作業や課題に対して最も精通している人が AI にも精通することが活用の近道と考えます。自分自身で学ぶことが一番手近に着手できるため、やってみます。
- ・リスクینگが言われる昨今ですが、単に技術に精通するのみではなく、余暇を作り出すことが重要と思います。効率化で週休3日制を実現すれば二泊三日の旅行ができる機会ができます。観光を呼びかける前提としても AI を学び使いこなす意義があると考えます。
- ・技術だけでは社会が先細りになることも学びました。日本のこころ・文化の要はやまとことばであると思います。こちらも手近な所で家庭にて子どもに和歌や十七条憲法のよみきかせをします。古語のリズムで平和・温和な間を探求していきたいです。
- ・最後に考えすぎても窮屈ですので座禅します。無私となって利他の生き方をしたいです。
- ・以上です。先生方、運営の方々、塾生の皆さま、貴重な学びの時間をありがとうございました。

14. 佐藤 剛

自啓共創塾を通じて、日本のこころの特徴は、自然と一体となって、八百万の神に表されるような多様性をはぐくみ、その多様性の良い点をうまく取り入れて習合していく柔軟性、そして意思疎通を通じて和を以て貴しとなす精神だと学びました。

一方で、この日本のこころは現代の日本人に確かに生き残っているが、現代の社会制度にこの日本のこころが浸透していない、機能していないと思うことも多くありました。

セッションの中で、「もともと、日本社会は民主主義的で（ラグビーやサッカーのイメージ）、科挙制度のよ

うな画一的な制度にそぐわなかったのではないか。明治時代からの官僚制は日本の長い歴史の中では特異なものという捉え方も出来る。」という印象的なコメントがあり、日本社会は、一極集中の中央集権型ではなく、本当はもっと多様性のある分権的な社会であり、その方が日本のこころの良さが活きるのではないかと思うに至りました。

また、「都市住民は不都合な真実を見なくなる」というコメントも非常に印象的で、明治維新から富国強兵の為に設計された社会制度はあまりにも効率的過ぎ、とりわけ教育制度は非常に画一的になり過ぎていて、日本のこころが持つ多様性を失わせてしまっているのではないかと思います。江戸時代、3千万人の人口に今の小学校と同じ数の寺子屋があったと聞き、当時の日本社会の教育を重視する姿勢、地方も独自に人材を輩出する力を有していた活気ある社会を想像しました。

全体的に悲観論が先行する日本社会ですが、中央集権的な体制に頼るのではなく、今こそ多様性を尊重し、各個人・地方が独自に盛り立てていく強さを改めて発揮するべき時だと思います。また、世界を見ても、欧米の価値観が絶対的な尺度となりがちな世界ですが、日本のこころが持つ多様性や人間の平等性がより強く人々に認識される余地があると考えます。子どもを育てるにあたり、地域社会と接するにあたり、仕事を進めるにあたり、このような意識をもって、少しでも社会を変えていけるよう行動したいと思います。

15. 安田秩都

「日本のこころ」が世界にとって役に立つと私が考えるのは、【個の存続より集団の和を重んじる】という観点です。特に地球環境や気候変動に関して世界的に問題意識が高まっている昨今において、利他の考えが意識せずとも根付いていることは貴重な環境であると思います。

そこで、この点から特に世界の持続可能な社会のために役立てる具体的な方法として、産業界で減反政策を目指すということが挙げられると考えます。つまり、大量生産的に製品を世界にばらまくという戦略ではなく、小ロットで高単価品の商品・サービスを提供すべきと考えます。次に私が考えるこれから日本が取り組むべきテーマと分野を紹介します。

- 次世代小型原子炉の開発
- 核融合発電施設の中心部位ジャイロトロンと周辺技術
- 最先端半導体の開発

今後私個人としては、このような日本発の科学技術の発展に対して何らかの役割を持って貢献したいと考えています。

16. 岩崎 隆

1, 皆さんへの勝手なご提案！

「日本製品を買い、大地に在来工法の家を建て、いいものを長く使いましょう」

車は日本車に乗り、日本の大工が建てる大黒柱と畳のある生活をし、品質のいい日本製品に囲まれ、長く大切に使う生活をしましょう。間違っても高層マンションはダメです。

「ごはん、みそ汁、漬物を食べ、粗食で、日本酒を飲みましょう」

日本人にはお米です。縄文人から続く日本人の体には、お米が一番です。発酵食品と組み合わせて粗食でいきましょう。家庭菜園の野菜が最高にうまいです。たまの美食家気取りはOKです。

「愛する人と結婚し、是非子供を産み育て、家族を大切にしましょう」

こんなこと言う人、今は絶対にダメな人と言われます。でもこんな当たり前のことも言えない世の中にしてしまったのは誰なのか？僕はあえて言います。結婚いいですよ。子育て頑張りましょう。

「自身のご先祖様を大切に思い、お墓参りをしましょう」

宗教ではありません。日本人の生き方です。日本人は連続生命観です。ご先祖様は30代さかのぼると10億人を超える。世界は間違いなくつながっていますよね！自殺も間違いなく減ります。

「道とつく何かを始めてみましょう」

柔道、剣道、合気道、弓道、茶道、華道、書道、歌道等、どの道も険しく厳しいものでしょう。道理、道徳であり、職人国家日本を象徴するものだと思います。禅道場で瞑想を！

「本日、自啓共創塾最終日に集いし皆さん、是非式典終了後は懇親の集い直会を」

共飲、共食、これが大事です。人は集い、人は話し語らい、互いに理解し、つながり合います。オンラインでは絶対にできないことがあります。会社の忘年会、社員旅行絶対に大事です。

2. 自身の実践と誓い

「人徳を高めるアプリ開発を行います」

携帯で毎日入力できる、人としての徳を高めるためのアプリ開発を目指します。

「日本再生子ども機構の活動を全国に広めます」

天明茂先生や全国の共感者と共にはじめた活動を、土居先生のお力もお借りしながら日本の未来を担う子どもたちのために全国へ広げ、大きな活動となるよう努めます。

「日本の素晴らしい事業家を世界に紹介し、より良い社会創りに貢献します」

世界のために日本のこころを伝える活動の一環としての自社の在り方を追求していきます。わが社、みちびらき株式会社の設立の原点を常に心に刻みます。

「挨拶名人と呼ばれるように日々精進します」

不機嫌そうな顔、眉間にしわを寄せている顔、威圧的、敵対的態度などを無くし、常に明るく自分から大きな声で挨拶します。

「英語勉強します」

他国の人に自身の想いを伝えるためにも英語を道具として使えるように努力します。

日本人であることに誇りと自信をもって、次世代に素晴らしい日本を語り伝えていきます。

17. 富田直子

私は、すべてのいのちが“らしく”輝き合いながら、地球一個分の資源で豊かに暮らす世界を、みんなと楽しく作りたと思っています。そしてそんな世界を作るための新規事業やプロジェクトを、仲間と共に考えるワークショップのファシリテーションを生業としています。

その際、大切にしている一つの視点が、我々は、人である前に、地球上の生きとし生けるものと共にある「いのち」であることを「思い出す」ということです。そうして思い出したいのちそのものである自分自身が、生命の持つ本質的なところからワクワクと再生するような事業やプロジェクトを起こせば、フラクタル構造にあるこの世界もまた、同時に再生していくのではないかと想っているからです。

私はこれからの日本が、世界中の人が、そんなクリエイティブなインスピレーションを得に来る「世界のトリートメントの場」になるビジョンを描きます。日本には、神仏儒の習合として形作られてきた“Spiritual but not Religious”の霊性があります。また、「平和」と「自然との調和」をうたう十七条の憲法の普遍的な価値

観があります。さらに豊かな自然と、間（あわい）の文化があります。個の文化全盛期を前に、「我々は、個である前に、森羅万象との関係の中にあってはじめて存在する現象なのではないか」などという、問いにも思いを巡らすことができる環境が、ここ日本にはあります。

私はそんな日本のビジョンの一翼を担うべく、日本人に対しても、また世界の人に対しても、「いのち」としての自分自身に立ち返るリトリートを、自然豊かな千葉は館山の地で日本のところと共に開催できたらと思っています。そして、皆が生命が躍動するようなワクワクとしたインスピレーションを得て、各地で新しい世界を形づくるお手伝いができたらと思っています。

——★発表ここまで★——

今回の講座を通じて、「I am Japanese」と発するとき持つ自身のイメージが、単調なものから、幾重にも重なる十二単のようなイメージに変化しました。遅ればせながらですが、まさに自分の日本人としてのアイデンティティの輪郭が見えてきた感覚を持っています。そしてそれは、思い起こせば祖父母や両親から教えられたことであり、学校の道徳や掃除の時間から学んだことであり、また、四季折々の自然の中に身を置くことで知ったことであり、さらに祭りや年中行事、書物やマンガからも知らぬ間に取り込んできたことでした。

講座を通じて、私が思い描く世界観の裏には、確かに日本のところにあっただということに毎回、気付かされました。ただこれは、学ばなければあまりに日常で、輪郭を持たないものでした。日本型リベラルアーツを学ぶ大切さを痛感するとともに、今湧き上がってきた日本人としての誇りを大切に、自身と世界をアップデートしつづけていけたらと思っています。

長きにわたり、貴重な学びの場を頂戴しました理事の皆様、塾頭の皆様、運営の皆様、講師の皆様、そして同期の皆様に、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

18. 匿名

今私たちが生きる世界は、パソコンやスマートフォンが1台あれば、国内や世界の人々となつなぎ、情報やアイデア、価値観を共有することが容易にできるようになったことで、価値観の多様化が進みました。現在の世界は、自国ファーストの考え方が強まる時代となっています。国内では、これまでの多くの人の努力によって、様々な権利が社会的に広く認められ、多様な価値観が尊重される社会になりつつありますが、一方で自らの権利に関わることや、関心があるところ以外には、無関心である傾向もみられるようになってきました。

自国の利益追求や個々の価値観の尊重は大切ですが、行き過ぎれば軋轢と分断を生み、社会には多くの価値観が多様に存在し、他者には関心を持たない、利己的な姿になりかねません。

自啓共創塾を通じて学んだ「日本のところ」は、この問題に立ち向かう力を示しています。

一つ目には、日本のところの特徴であり、長い縄文期に培われた古神道に仏教と儒教を習合させた十七条の憲法の精神があります。異なる意見を排除せず、それぞれの良い面を取り入れ「習合」という考え方は、現代に至るまでその後の日本の文化や思想の根本にあり、大きな影響をもたらしました。今の状況においても、対立を超えて異なる価値観にも良い点を見出し、習合させる力が、各方面での対立を和らげ、それぞれが共存できる仕組み作りに大きく貢献するのではないのでしょうか。

二つ目には、日本文化や思想、武士道に大きな影響を与えた禅における「利他」の精神があります。「利他」とは、自分自身を含む生きとし生けるものすべてのことを指しており、その精神もまた日本のところの大きな要素となっています。他者への無関心ではなく、それぞれの立場において、自分と相手を分け隔てなく、自分のことのようにして、相手の立場に立ち行動し続けられることは、日常の生活から地球規模の問題

に対しても力を発揮すると考えられます。

日本人のところがこれからも引き継がれていくためには、先人たちの精神や文化を学ぶ機会が身近にあることが大切です。特に、幼少期に学ぶことができればより自然に体得することができるようになります。それにより、普遍的な価値観を共有する社会に近づくのではないのでしょうか。

日本のところが引き継がれていくために、今後、私が取り組みたいことは、この学びを継続して深めていくことです。近代の歴史観の他、日本の文化の成り立ちなどについて、理解を深めていきたいと考えています。

そして、私の夢は、日本のところについて学んだことを次世代の、特に幼少期の子どもたちに、伝えていくことを、ライフワークにしたいと考えています。

例えば、合気道の教室を開き、武道を通じて礼儀作法や日本のところを学んでもらう機会を提供したり、音読・素読を大切にしていた寺子屋のような学びの場を提供したりすることができたらと思っています。

これまで学んできた中でも、それぞれの国や文化や個人の考え方のプロセスを尊重し、互いに学びあう姿勢があることが素晴らしい日本のところの特徴であると考え、日本人であることを誇りに思うとともに、日々実践していきたいと思います。

19. 西田敏典

約7カ月間に渡りこの自啓共創塾ではたくさんの人達と対話をしてきました。たくさんの人達とは、この国を作ってきた歴史上の偉人達、自分が全く知らなかった専門分野を研究している方々、そしてこのままではいけないのではないかと真剣に日本の未来を考えている塾長・塾頭・塾生の皆さんでした。振り返ってみると常に比較対象としていたのは日本と海外諸国、日本人と外国人、塾生の皆さんの考え方と自分の考え方だった気がします。偉人達の言動を学ぶにつれて、度々思う事がありました。それは皆「あたりまえのこと」を考え、実践してきた結果が歴史になっているという事実でした。もしかすると私の考える「あたりまえ」は外国の方にはあたりまえではないのかもしれませんが、しかし、少なくとも私にとってはあたりまえのことであると思ったと同時に、その考えに共感できる自分自身に誇りを感じました。これが自国の文化であり、自分の価値観のルーツだったのだなと確信した瞬間でした。

これから私達は国内外で助長されつつある分断と向き合っていかなければなりません。分断の解決策は対立ではなく融和しかないと考えています。融和とはまさに日本が長い歴史の中で作り上げてきた価値観そのものであり、それをあたりまえだと感じる事が出来る私自身であるとも言えます。

視点を足元に戻しますと、私の仕事である経営は諸外国から見た時にしばしば日本型経営と表現されることがあります。私の考えでは日本型経営は契約や規約のみに判断基準が絞られるのではなく、こと人と人との繋がりに関しては諸外国と比較すると有機的で寛容性が高いのが特徴です。これは日本の法律によるところの独自性もあるとは思いますが、経営者と従業員の大半が日本人であることによって長きにわたり共通の価値観が維持されてきた影響も大きいと思います。私はこの経営の根本は変えずに海外で展開したいと考えています。文化や価値観の違う者同士がお互いのそれらを認め合い、共通の価値観を作り上げていくことが出来れば、事業を通じて真の国際化に少しでも近づけることを信じて。

最後になりますが、自啓共創塾の運営にあたり尽力いただいたスタッフの皆様、共に学び多くの気づきを与えていただいた塾生の皆様に心よりお礼申し上げます。

20. 匿名 これからの私自身の仕事への取り組み方について

(1) はじめに

改めて自啓共創塾に参加して感じたことは、過去も現在も未来も、自分が見えていないところで色々な変化（良い変化も悪い変化も含む）があり、その変化に対応していくことが求められていることです。

その変化に気づき対応していくためには、「何が本質的な課題か」「どういった解決策が有効か」を考え続けていくことが必要ですが、今の日本の教育では、本質的な問題や課題ではなく「暗記」がメインとなっているのが実態です。

そこで、「そういった問題を改善していくために、自分がこれから取り組んでいけることは何か」として、「自分の会社で働いている人が、本質的な課題をとらえて解決策を考え続けることができる」状態を作っていくことを目指していきたいです。

(2) これからの私自身の仕事への取り組み方について

「変化に気づき対応していくために、本質的な課題や解決策を考え続けていくこと」を目指すにあたって、今私の勤める企業で足りていないことがあります。今の私の勤める企業では、「業務上のミスをなくし、業務を標準化すること」を目的に、細分化された作業をこなすことが日々求められています。そのこと自体は、お客さまにいつでもどこでも均一のサービスを提供する、という観点では合理的ですが、じわじわと「考える力」が無くなっていくというデメリットもあります。

そこで、西郷隆盛の生きざまを支えた「郷中教育の詮議」を参考に、「課題を討議しながら解決策を模索し、その解決策を実行に移す」というプロセスを、もっと日々の業務において採用し実践していくことが必要だと考えます。

具体的なアクションとして、以下の2つを実践していきたいです。

① 自身の部署で、メンバーと課題を討議する場を定期的に設けること

② 自分が異動しても、そういった取り組みをやり続けること

①についての具体的な内容ですが、四半期に一回でよいので、メンバーを集め、過去の検討時から起きている変化は何か、また、そこから出てくる課題は何か、という観点で議論をするというものです。

また、②としてあえて記載しましたが、単発ではなく「やり続けること」を目指します。

(3) さいごに

今回自啓共創塾に参加し、改めて「言葉にすること」の重要性を感じています。具体的には、ふとした誰かの疑問や意見が、実は私には全く想像できていない内容がたくさんありました。そういった体験を、自分だけではなく周囲の人も巻き込んでいければ、すごく楽しい社会になるのではないかと、思っています。みなさま、ありがとうございました。

21. 岡崎 靖典

この塾を受講して、もっとも感じたことは、いかに私たちが日本のことを知らないか、あるいは、学んでこなかったかということである。

私は、学校では受験教育を受けて育ってきたが、両親は昭和一桁だったから、家庭では戦前ふうの躰を受けた。だから、自分の子供にも同じようなことを言っていることがある。家庭の中に、戦前の雰囲気というものが残っていた。ただ、そういう家庭に育った私ですら、日本のことについて、今回初めて知るところが多かったのである。

教育は、知識だけではなく、こころも含む人格全体を育成するもののはずである。ところが、戦後教育は、学校における知識と問題処理能力の形成に特化してしまい、家庭や地域（薩摩の郷中教育のような）が本来持っていた教育機能は低下してしまった。

しかも、限界集落と言われるように地域自体が高齢化、過疎化の中で衰退している。地域社会が消滅すれば、そこに生きた人々の歴史も文化も、何よりもふるさとが消滅してしまう。

こうして、時を経るほど、日本のこころはますます希薄化し、アイデンティティも誇りも失われていく。

戦後日本が所与としてきた環境が厳しく変化している中、この国が、次々立ち現れてくる問題（と思われるもの）を前に、海外に範を求めて右往左往し続けているのも、我々の先人達が紡いできた歴史とこころによりどころがあるにもかかわらず、私たちがその不易の部分を見失い、自信を失っているからだと思う。

私は地方公務員として、次世代の我が国を担う子供達が、日本がどのような国で、この国に住まう人々がどのようなこころを持つ人々であるのかを知り、この国と自分自身に誇りを持てるようにしていきたい。

そのためには、初等教育の段階から、少なくとも自分たちのふるさとについて学ぶことである。和歌山県では、「わかやま何でも帳」という、地理や歴史、文化、言葉、先人など、郷土について総合的に学べる副読本を作って小学校から活用している。こうした取組をさらに拡充していくことにより、ふるさとのことを知り、ふるさとに愛着と誇りを持つ子供達を育てていきたい。また、小学校から「素読」のようなことができないか。意味は分からなくとも、日本語のリズムや語感に親しんでいくことも重要だと思う。

次に、地域社会を守っていくことも必要である。今、祭りもできなくなる集落が多い。また、地域の共同作業の担い手もない。これは決して田舎だけの問題ではなく、都会の団地やニュータウンでも見られることである。そうした地域に、地域の担い手になってくれる若い人達が移住してくれるようにしていかなければならないし、生業を成り立たせるようにしていくことも必要である。

私自身、子の親である。13回目のグループ討議で、親である自分達がいかに子供達に自らの背中を見せていくことができるのかが大事だという話をした。両親から受け継いだものや私が学んだものを、子供達に受け渡していきたいと思う。

22. 山本英幸 和魂あふれる日本社会の実現

塾の感想：当初、自啓共創塾には、何か政策や施策などを立案していく際に、日本の方針となるような本質的な考え方について学びたいと思い、参加させて頂いた。そして、この塾を通して、「日本のこころ」（自己犠牲を厭わず、他者を思いやる気持ちや感性を重視する考え方）が日本の方針となることを実感した。特に、この「日本のこころ」は、個々の政策の専門知識だけでは、乗り越えることができないような日本の課題に対処していく際に非常に重要になってくるものである。例えば、個々の政策の中には、メリット・デメリットだけでは、優劣は決められない場合があるが、このようなときに、それらの政策が「日本のこころ」に沿ったものになっているかどうかという観点で考えることで、必要な政策を決められる。

日本の現状：現代の日本は、日本の正月などの年中行事の由来などが教えられることがなく、日本の伝統や文化について学ぶ機会が少ない。そして、道徳について学ぶ機会も少なく、それが故に、西洋的な物質中心主義や利己的な心が浸透している。例えば、昨今の政治において、選挙偏重型の政策が多くなっており、一貫した国家理念の追求ができていない。また、小学校から大学までの教育方法も、専門知識重視の教育方法が主な手法となっており、「解は一つである」ことを教える教育となっている。このままでは、短期的金銭重視の価値観が蔓延ってしまい、利他的な精神を持つ日本の伝統や文化が廃れていってしまう。

問題：本来の日本の伝統や文化は、他者への思いやりに溢れており、公益重視の価値観である。しかし、このような価値観が広く国民に浸透していない原因としては、①学校教育で「日本の心」を学ぶ機会がない。②知識詰め込み型の教育が重視されていることが背景にあると考える。これにより、日本人は答えは一つしかないと考え、そして、日本の心をそもそも学ぶ機会がないので、日頃のテレビから物質的豊かさを目の当たりにしているが故に、物質中心的価値観を絶対視してしまっているのではないだろうか。

何をしていくべきか：このような状況から脱却していくためには、私個人ができる活動として、短期的なものの中長期的なものを述べる。短期的な活動としては、日々の業務において、日本のことを意識しながら、各種政策や施策の立案に取り組んでいく。また、職場の同僚に日本の魅力を伝えていく。日頃の生活において、日本の魅力を積極的に考えようと思わないと、日本の魅力を意識することはあまりない。したがって、日本の魅力を自らが情報発信をして、日本の魅力を考えるきっかけを作る。

中長期的な活動としては、道徳塾を設立し、和魂を含む道徳教育を若者に充実させていく。小中高の学校教育で、道徳教育を充実させていくことは重要なことであるが、政治家あるいは文部科学省の役人となり、制度を変えていく必要があるため、実現可能性の観点からはハードルが高い。したがって、現実的には、道徳塾を民間組織として設立し、若者に道徳教育を充実させていくことが方法として考えられる。そこでの教育方針としては、道徳教育や「世のため、人のため」や「他者のため」という和魂を養うとともに、それが座学のみにとどまらないように、ボランティアなどの様々な課外活動を通して、知行合一を意識した活動となるようにする。

23. 匿名

「日本人はどこからやってきて、どこにむかおうとしているのか」「なぜ我々日本人の文化や思考は独特なのか。この独特の文化や思考はどこから生まれたのか」という多くの日本人が感じるであろう疑問について、私自身も明快な答えを持ち合わせていなかった。今回の自啓共創塾の中で「日本のこころ」というものを示していただき、この疑問に対して曲がりなりにも自分自身の考えを持つことができたように思う。

我々の「日本のこころ」は決して、自らの親や教師からだけ学んだのではなく、脈々と先人から積み上げられてきたもの、遺伝子の中に息づいているもの、である。時にそれは、幕末から明治維新のエネルギーに満ち溢れた躍動感として現れ、また時には東日本大震災の際の、利他となる行いに現れた。

「日本のこころ」では、言い切らない・伝えきれない、余韻・余白の中に美しさを見出す。一方でそれは、いい面ばかりではなく、文化継承の危機を招きかねない。さらには、伝えきれなくとも意思疎通ができていることを求め、下手をすると同調圧力や一部過激派の暴走というリスクも抱える。しっかりとその両面があることを理解する必要がある。

話題提供では様々な気づきをいただいたが、その中でも特に印象的だったお話が2つある。一つはマンガのお話。数多くのアニメ・マンガが人の使命や目指すべき姿について、心に響く言葉で語りかけてくることに関して、作者の方は、最初から全体ストーリーを決めてから書いているのだろうか。最初から決めていたのだとすると、その構想の深さに驚くばかりである。最初から決めていないのだとすると、それは作者の心に宿る「日本のこころ」が自然と自己犠牲・利他・あきらめない心等のストーリーに引き込み、登場人物に語らせているのではないか。Silversnow様は「一定程度売れると作者は好き勝手やる」とおっしゃっていたが、その好き勝手が、ほとんど「日本のこころ」に通じるものである気がしてならない。さらに邪推だが、現代においてはマズローの欲求5段階説の生理的欲求および安全欲求が満たされると、「日本のこころ」が発動しやすくなるの

かもしれない（過去は、生理的欲求が満たされなくとも「日本のこころ」は発動していたが・・・）。

もう一つは剣道におけるガッツポーズのお話。個人的には野球（大学野球・社会人野球）等の試合後のお互いの検討を称えあうエール交換が大変好きで、これは勝敗を超えた相手への敬意の現れであり、「日本のこころ」そのもののような気がする。それはベースボールにはない。一方で、例えばサッカーの試合において、ゴールを決めたり、勝利を勝ち取った時にあげる雄叫びも、個人的には「美しい」と思う。西洋発祥のスポーツといえどもそれまでだが、その根底には自己表現があるのだと思う。どちらかが正解でどちらかが不正解、またはどちらかが優れていてどちらかが劣っている、ということではないと思う。重要なのはその背景にあるものをしっかりと理解するという事ではないか。

また日本人は欧米の新しい発想・基準などを取り入れることが多く、欧米に後れを取っていると考えがちだが、話題提供とその後のグループワークを経て、既に日本人が同じようなものを過去に既に実践していたというケースが数多く存在することを認識した。さらには、改めて自分達の先人の知恵に多くのヒントがあることも知った。聖徳太子の十七条憲法はその最たる例である。我々は、日本人であることにもっと自信と誇りを持っていい。この点においては勉強不足を痛感した。

ウクライナ情勢・深刻化する環境問題等、今、世の中は混乱の時期の入り口に足をかけてしまっている気がする。何とか平和な時代が継続し、環境問題が改善の方向に向かうことを願わずにはいられない。様々な価値観がぶつかり合う現代で、「習合」にあらわされる「日本のこころ」が大きな役割を果たせるのではないかと考える。

自啓共創塾を通じて、自分の意見をもてていない、自分の意見をもてるほど勉強できていない、と痛感した。「日本のこころ」をさらに深堀し、しっかり学びを進めたい。そしてそれをまずは自分の子供に伝えたい。その上でいろいろな人にも伝えていきたい。

大変有意義な学びに参加させていただきましてありがとうございました。

24. 三石晃司 日本人としての誇りを持って出来ることから始める

私は、日本人がグローバル化の社会で競い合うことができるのか、というテーマを持ち、期待と不安をもって入塾しました。

日本人には、習合といったように器用に他の文化を取り入れる、神道の時代から見るような自然との共存・共生。和を大事にする精神。清らかであることを是とする心。といった素晴らしいものが根付いていることを学ぶことができました。

私は海外での経験やつながりが全くと言っていいほどなく、学んだことがいまピンとこないこともありましたが。しかしながら、ワールドカップでの日本人の行動を取り上げる世界各国のメディアを見ると、「日本のこころ」はどの国にも備わっていない、大変誇らしいものだと実感しました。

地球の資源は限られている。そのことに気付き、温暖化などにより実感し始めた人類。課題はグローバル化していて、国家間の連携、協力そして各国の行動が求められています。解は1つではなく、様々なアプローチがあると思います。そんな中私たちに根付いている調和や責任感、そして人としての清らかさ、美しさはまさに世界に対して活躍できる武器になるものだと感じる事ができました。

現代は、経済的な格差が大きくなっていることがクローズアップされることもありますが、物が飽和し、一定の経済的な保証もされており、社会をもっと良くしていこう。という気持を持たなくても生活できてしまいます。自分さえ良ければよいということではなく、改めて過去の偉人たちに学び、自分たちから道を切り開く

必要があるように感じます。

世界規模の課題に自身に何ができるのか、日本人として何ができるか、大それたことを行うのではなく、例えば、環境問題を考えて、(海の近くに住んでいるので)海野ごみ拾いに参加し、その輪を広げていくとか、世界規模での課題に身近なところから取り組んでいこうと思いました。

最後にアイデアとして、日本人の一人ひとりが自分が日本人らしいなという行動をインスタグラムやツイッターなどを活用し、発信する「OneAction OneTweet」若しくは「SamuraiAction」(ネーミングセンスはありませんが)という活動ができないかと考えています。仕事の都合などで欠席することも多くありましたが受講した会で「日本人のこころ」に触れたことで、私自身誇りを感じることができました。しかし、今は特別にそのような時間を設けない限りは実感する機会もありません。そこで、日本人らしいなというアクションを誰もがフリーにツイートし広げていくことで、日本人のこころを実感したり、考えてみたり、ちょっとした行動につながったり、ボトムアップ、和を大事にする日本人の心に期待して草の根活動を広げられたらいいなとも考えています。余談でした。

25. 中村浩輔

日本人が培ってきた心は現代の人類の善意・正義の中心にあり、日本人は全ての人類が手を取りあう手助けができる立場にあると信じるものです。

私は講義に後半はほぼ直接参加することが叶いませんでしたが、今回の機会をいただき、改めて日本人としての誇りと心の素晴らしさに確信を持ち、今この時から実践するものです。

まずは、日本の国土の大半を占め、心を育んできた中山間地域の国土を守るべく、田畑山林の存在意義を地域の伝統文化と照らしながら見つめなおし、食糧・エネルギーの地域循環型社会の人本主義の再形成を行います。日本人特有の地政学を活かした地域産業起こしのビジョンを来年より行っていきます。ホームページや漫画、アニメーションを用いて世界にも同時に発信していければと考えます。

また、長期的ビジョンでは中山間地域でのSDGs4.0、CSV事業を基本としつつ、その自給、日本の心を未来永劫守っていける基礎を固め、日本全土で宇宙産業の中心を担う一助になる政策の立案をもって、世界・社会に対しての模範を示し、この星を、人類への助けとなるべく邁進して参ります。

26. 大野 敏

世界規模で資本主義経済の高度化、効率的な体制の追求が進むなかで、個人と社会に、無関心と分断が進んでいます。そして、このことが対立を惹起し地球を含めた社会の持続可能性を脅かしています。一方、資本主義の価値観には抗い難い魅力があることも事実です。とすれば、個人と個人をつなぎ、社会と社会をつないで、利他の精神で解決策を見出し実行していくことが不可欠です。「何かと何かをつなぎ、対立を超え、新たな価値をつくる」。この思考そのものが「日本のこころ」だと思います。「日本のこころ」は包摂的です。状況にあわせて変化する柔軟性、敗者を包含する包容力、一人ひとりの経験と能力を協調させる現場力、全体(チーム)の中での自分の役割の認識など、社会(世界)全体をひとつのチームと捉え、課題を有機的に解決する知恵として、「日本のこころ」は貢献できると考えます。

一方、「日本のこころ」には、インプット、アウトプットの両面で課題があると感じます。まずインプット面では、できるだけ多くの人が、意識的に、「日本のこころ」に、経験として触れる機会を増やしていく必要があると考えます。「日本のこころ」は秘伝のタレのようなものです。秘伝のタレの容器に注ぎ込まれる昨今の

グローバル化のタレのボリュームは多く、注がれるスピードも速くなっています。かつての「和魂漢才・和魂洋才」のように「魂」としての秘伝のタレを守れるかは、私たちのインプット自体が極めて重要だと考えます。またアウトプット面では、自分の持ち場で、自らの意思で、明るく自信をもって「日本のこころ」を発揮する（してよい）という意識改革が必要です（その先には、持ち場を超えることも必要です。）。ともすればこれまでは、「日本のこころ」の発揮のきっかけは、外圧によることが多かったように思います。また、私が10～20代の頃は、よく「日本人には個性がない」と言われ続けました。しかし、多様性のある社会を是とすれば、「日本のこころ」を持つことそれ自体が個性と評価できる時代になったと思います。

社会に出て以来、上司から「評論家になるな」と言われ続けてきました。正直、意味が分からず苦悩したこともありました。しかし、今では、「自らの主張をするだけでなく、関係者の主張に耳を傾け、習合し、正しいと考える方向に、一歩でもよいから、チームとして近づくように具体的に実行・変化すること」だと考え、実践するようにしています。まさに「日本のこころ」そのものなのかもしれません。今後も、自分の置かれた立場（会社）で、実践を継続すること、更には持ち場を広げ、磨きをかけることを愚直に実行したいと思います。そして、人生100年時代。関心を広げ、業務外の持ち場でも、会社外の地域やボランティアなどの場（国内的な視点にとらわれすぎず）で、「日本のこころ」をともに経験する仲間や機会を増やすこと、刺激を受け合う場を設定することについて、背伸びせず、地に足をつけ、ステージを広げて挑戦していきます。

27. 櫻井晃太郎

大学生である私はあんまりこのような機会をいただけることはあまりない、そのためいい機会に恵まれたと思う。大学生にとって大人の方々と話すことは本当に良い刺激になった。

基本はオンラインだが一度対面で皆様にお会いした時が一番印象に残っている。

この会議はどのような「色なのか」という質問された。私は白色と答えた。なぜならまだ何色にも染まっていないような印象を受けたからだ。そのほかメンバーの皆さんは茶色や黒、藍色などのポップな色ではなく日本でよく見るような和式の色をみなさん答えていた。誰1人として自分の班では色は被っていなかったのだが、イメージはみなさん同じ感じを受けているのだなと思った。今私の通っている大学では多様多文化な世界にいるがこの塾は日本の心を思わせるような講義がたくさんあった。高校時代、日本史を取ってない僕に取っては様々な新しい発見を多くさせていただいた。ここの塾に通われている皆様も大変博識な方々ばかりで毎回のディスカッションでは感心されればなしだったと今振り返ると感じる。また大人になった時に皆さんと同じくらいのしっかり芯のある自分の意見を出せるようになりたいと思った。

28. 兼久 将 「こころ」とは何か

今回自啓共創塾へ参加させていただき（数多くは参加できませんでしたが）「こころ」という抽象的な表現に対して、定義のようなものを考えるようになりました。

人間共通の「思考」（寝る、食べる、歩くなど）と、積み上げてきた歴史の中で形成された「思想」と、それぞれの環境で醸成される「性質・性格」を掛け合わせたものが個人の「こころ」と言われるものなのではないかと思います。

これからの日本は「日本としてのこころ」を紐解き、これまでに学んできたことを棚卸し、何が出来るのか？何のために？誰のために？を振り返ることから始まるのではないかと感じております。そうすると課題の本質が見えてくると思い、解決のためにそれぞれが持つ個人の「こころ

ろ」が貢献できるのではないかと考えます。

サッカーやラグビーなどのスポーツ、天災やコロナなどの非常事態では「こころ」が一つになることは実現されているわけで、他のシーンでも私利私欲のない高貴な目的が共有されることで「こころ」が動くと思います。

29. 中村 泰之 不易流行のこころを持ったリーダーを目指して

私は自啓共創塾に参加し、日本には世界に誇れる「日本のこころ」があるということを実感として気づくことができました。これはただ本を読むだけでは得られない、貴重な経験だったと感じています。

毎回のグループディスカッションでは、まるでドラえもんのタイムマシンに乗って、様々な時代に行き、その時々活躍した人がどういう考え（思想）を持っていたのか、今の時代に置き換えるとどうなのか、今の自分の立場から見るとどうなのかなど、背景の異なる塾生の方々とディスカッションすることで、多様な考え方があるということに気づき、大きな刺激となりました。

特に私自信は元々理系の技術者としてメーカ企業に入り、歴史は学生の頃から苦手でしたが、改めて社会人になって学んで見ると、食わず嫌いだったのかなと、むしろ新たな知見や新たな考えに触れることは大きな刺激になるのだなと実感しました。

今回の学びを踏まえ、私は「不易流行のこころを持ったリーダー」を目指したいと考えています。それは、いつまでも変わらないもの（不易）として、日本のこころを自分の中に持ちつつも、新しい考えや意見、知識（流行）を取り入れることができる人材をイメージしています。ただし、まだそれは自分の中ではぼんやりしており、リーダー像がくっきりとした画にできるほど具現化できていません。リーダー像をもっと具体的にイメージできるように、そしてそれが自分と重なるように、「日本のこころ」について、今後は自調自考を継続し、もう少し広く、そして深く学びたいと思います。また、職場の部下にもリーダーとして、日本のこころについて伝え、継承していければと考えています。

最後に、貴重な学びの機会の提供頂いた事務局の皆様、一緒に学んだ皆様、どうも有難うございました。

30. 妹尾 駿

“日本”を見出すために（続）

日本社会には「不屈の精神力」がある。現代史でも未曾有の自然災害と人為事故を巻き起こした東日本大震災の被害から一致団結して乗り越え、現状復帰だけでなく未来に繋がる復興を遂げた。日本文化には「融合力」がある。ガラバゴスの中で育った伝統的な文化を新たな技術や社会の流れに呼応して進化させた。日本経済には「底力」がある。かつて国土が痛んだ第二次世界大戦から持前の勤勉性を活かして製造業を中心に前へ前へと推し進めた。しかし、日本は昨今のグローバル世界の拡大や人口減少、複雑化していく社会問題に揉まれる中で自身のアイデンティティを見失い、かつて国民が団結して進んでいた様な道筋を見いだせなくなっている様に感じる。日本には、過去何千年もの日本の歴史が文化・常識・国土に刻まれており、この国に住む我々は無意識的にその“財産”を共有化している。私は、この財産を活かして日本経済が国際的にユニークなポジションに位置づけられるための一助となりたい。そのためには、日本経済に影響を与える“財産”を理解しなければいけないし、扱えるべきだ。「日本のこころ」の理解はその一歩となったと感じている。

31. 馬場もも子

(1) これから先どのような世の中にしたいか

最近、友人と自分たちの子供は幸せに暮らすことができるのかという話をしました。その背景には、VUCA時代と言われる現代において、戦争や地球温暖化、AIの台頭など、私たちに急激な変化をもたらす問題への不安があると感じています。私自身も将来に漠然とした不安はあり、自分に子供ができたとして、その子が幸せに生きていける世の中になっているとは自信を持っていうことはできません。若い世代が、将来に不安を感じていることはとても悲しいことだと思います。

この出来事をきっかけに、これから先どのような世の中にしたいか考えたときに、漠然としています。若者が将来に希望を持てる世の中にしたいと思いました。

(2) 日本のここらはどう貢献できるか

① 環境問題に対して

- ・自然に畏敬の念、感謝の気持ちを持ち、共生していくという考え方の普及
- ・CSRの規範と言われる「三方よし」の考え方も軸にした企業の活躍

② 教育に対して

- ・自己肯定感・自己有用感を育てる、世界で活躍するリーダーを輩出する教育の普及（周囲の人に信頼され、自分の意見を主張し、周囲の意見を受け止め、社会の役に立つ経験）

(3) 自分が将来取り組んでみたいこと

① 環境問題に対して

水道をひねれば水が出て、スイッチ一つで電気がつき、24時間買い物ができる世の中で、自然の恵みに感謝する機会は少ないと思いますが、私たちは自然を享受して生活していることは確かです。

私は商社の業界団体で働いています。商社は、商品の原材料調達から消費者の手に渡るまで、全ての段階で関わりを持っています。こうしたビジネスを展開する商社だからこそ、消費者に対して、商品の川上を意識させるようなきっかけを作ることができるのではないかと思います。また、商社は「三方よし」という近江商人の考えの下、環境問題に対して様々な活動を行っています。微力ではありますが、商社の業界団体での広報活動を通して、自然に感謝し、共生していくという考え方を普及することに貢献したいと考えています。

② 教育に対して

この塾を通して、寺子屋教育のすばらしさを知りました。現代の日本では、答えのある問題を解き、決まったことをひたすら暗記する、受動的な教育が行われていますが、今後世界で活躍する人材を育てるためには、答えのない問題について考え、周囲と議論をし、上下関係なく互いに教えあえる、能動的な教育の場が必要だと思います。

現時点では、明確な取り組みは思いつきませんが、将来的に何かしらこうした教育に関わる活動がしたいと思うようになりました。

32. 祖父江謙介

ウクライナ問題に端を発した各国の経済安全保障を求める動き、それによって発生する経済活動の不透明感をはじめ、世界は激動のタイミングを迎えています。

その中で、先人の智慧・価値観の本質を学ぶことにより改めて、自己について考える機会を頂きました。

どのような集団・組織の活動であれ、本質的には“人”と“人”の営みの中にあること。人の営みは、あまた

の先人の歴史の中で生まれてきていることを改めて認識致しました。

今回、偉大な先人から「日本のこころ」について学びなおし、そして、統合智の重要性を感じる機会を賜りありがとうございました。

仕事柄、様々な違う意見の方々と接することが多いのですが、その意見の違いに注目するのではなく、やはり、お互い“人”であること、それぞれが目指している“幸せな世界”に着目して活動をする。そして、“和をもって尊しとなす”、“利他の精神“を大事に、よりよい社会の構築に貢献できるように自らも日々精進していきたいと改めて感じております。

33. 名川弥奈

- (1) これから先どのような世の中にしたいか。そこに日本のこころはどう貢献できると考えるか。

世界的にも不確実性の高まりが叫ばれている時代であるからこそ、人々が多様な価値観を「発信」し、よりよい生き方や未来に向かって「共創」できる世の中にしていきたいと私は考えている。中でも「発信」と「共創」についてより具体的な考えたことを以下に記載した。

まず「発信」については自らの言葉で思いや考えを伝えることが必要ではないか。インターネット検索であらゆる情報にアクセスできる今、文学や映画の結末は1分で手に入り、作品の解釈に関して他人の発信した情報に悪い言い方をすればただ乗りできてしまう。自分の内側から生じた感覚も借り物の言葉で代替できてしまう。しかし、元々日本語は自らの感情の動きを、時には三十一文字もの短いセンテンスで一定の形に昇華することが可能なほど、豊富な語彙を持つ言語である。世界の人々とコミュニケーションを図る道具としての英語習得が大事なことは勿論であるが、表現力に富む日本語を母語とする我々が、疑問や違和感を言葉にして発信する術を磨き実践していくことで、社会課題に対しても新たな視点を提供するきっかけを作ることができるのではないだろうか。そのためにも、五感で日本語の豊かさを経験できるような教育（例えば、かるた遊びで百人一首に幼少から親しむ、歌枕や文学作品の舞台を実際に訪れてみる等）を積極的に取り入れても良いのではないだろうか。また、「共創」について考えるにあたっては、一つ興味深いデータがあった。平成30年の若者白書に示されていたが、世界と比較して日本の若者は「自分が役に立たない」と強く感じている層ほど「自分自身に満足している」という割合が低いようだ。つまり自分以外のものの役に立つことで相手はもちろん自分も満足を得る、つまり利他の心が根付いている表れといえないだろうか。異なる価値観を持つ他者との対話については時に困難も伴うが、こうした利他の心を素地に、武士道で示された「義（公儀）」や「仁（惻隠の情）」を以て対話を重ねることで、多くの人にとってより良い社会・世の中にするための「統合智」を深化させられるようにしたい。

「武士道を身につける」というと堅苦しさがあるが、日々の経験を通じて自分のものにできるように、早期教育の段階で組み込むことができないうだろうか。

- (2) そのために、自分がこれから、または、将来取り組んでみたいこと。

最近「人的資本経営」が人事領域でホットワードになっているが、これ自体は新しい発想ではなく、本塾で取り上げられてきた先人たちについても、人こそが社会を動かす原動力であり彼らに仁愛を以て向き合うことを念頭におきながら行動し、その結果、世の中に貢献する大事を成せたのではないかと考える。(1)で示した世

の中を目指すために、私もまずは自分と異なる考えを持つ他者のところを汲み、礼儀を以て接することを意識して実践したい。

34 松本ありさ これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢

世界情勢が目まぐるしく変化している今、改めて日本人があるべき姿について考えなければならないという思いから、自啓共想塾に参加いたしました。そこから学んだ事や自分の考える日本にあり方について自分の考えをまとめて今回発表します。一昔前の日本は先進国として名を広げていましたが、いつの間にか発展途上国に変化しつつあります。その理由として様々な要因があげられますが、大きな原因の一つは「日本人の謙虚さ」を失いつつある事にあると思います。日本が劇的に変化していた1960年代では、日本人は先進国から学ぶ精神が強く根付いていました。それは、パナソニックの松下幸之助が挙げている謙虚さの3要素である「価値を知ること」、「耳を傾けること」、「すべてに学ぶ心」にあると思います。まず、第一に周りの価値を知る意識をする事で、自国と先進国の状況を冷静に比較や判断をし、自国の強さだけでなく弱さも分析できるような自国の立ち位置の分析意識が備わります。しかし、今の日本の立場は不明瞭であり、立ち位置を確立できていない状況が長期的に続き、不正確な肯定的自己認識をもっていると不適応を起こしてしまいます。そして第二に、周りに耳を傾ける意識をする事で、新しい気づきを得ることができるようになります。この「誰に対しても何事に対しても耳を傾ける心」は、まさしく国を率いるリーダーに必要なスキルです。しかし今の岸田政権は、日本の全体のバランスを分析しきれておらず、さらには偏りのある条例を出し続けて国民の不安を助長させています。第三に、すべてに学ぶ心を持つことで、他人の意見から学ぶ姿勢が出来、ひとつの考え方に捉われずに素直に他人の考え方から学び、様々な考えを取り入れていけるようになります。柔軟な考えで世界情勢に後れを取らないようにしていくには必要な姿勢だと考えます。一般的な辞書で「謙虚」という言葉を調べると、「控えめで、つつましいこと。へりくだってすなおに相手の意見などを受け入れること。またそのさま。」などと書かれています。しかし、最近ではこの言葉の意味が「遠慮して自分の意見を述べずに相手のどんな意見にも同調したように見せる事」というように変化してしまっています。本来の日本人の勇ましい姿とは違った形で解釈されるようになった現代では、日本人は本来の日本の精神を改めて学ぶ必要があり、日本の精神がどれだけ世界にいい影響を及ぼすことができるかを理解している人々が、そのきっかけを作るべきだと考えます。

37. 乙咩愛海 「多様性を生きるこれからの時代と日本のこころ」

(1) はじめに

自啓共創塾で学んだ半年間、様々な人と意見を交わし学びを深めることができました。その中で、「自分の心に基づいて行動すること、そんな自分を信じることの大切さ」、「大事なものは知識の豊富さだけでなく、自分が持つ知識から何を取捨選択するか」、「教養を身につけると自由になれる」など、自身の考え方の軸となる言葉を先輩方から教わることができました。

(2) これからの日本と日本のこころ

日本では今後さらに少子高齢化が進むことを踏まえ、人種や国籍、性別、年齢を問わず、誰もが生きやすい、働きやすい環境づくりが必要になると感じます。その中で、ハード面での整備はもちろんのこと、ソフト面でも一人ひとりが違った考えを受け入れる日本のこころが大事になるのではないのでしょうか。目に見えるものだけでなく、その裏にある心を汲み取れる、そんな思いやりを持つことが大切だと思います。

(3) そのために取り組みたいこと

自啓共創塾では話題提供者の方々から貴重なお話を伺うとともに、参加者のみなさんと意見交換を行う中で、冒頭で述べたキーワードのように「物事に対する考え方」を学ぶことができました。今後も、幅広い年代の方々と自由に学ぶ機会を積極的につかみ、多様な考えを受け入れる力を深めていきたいと思えます。

伴走者レポート

以下は、オブザーバー、アドバイザー、塾長、塾頭、事務局員など、塾生の伴走者として共に学んだ伴走者のレポートです。

井上淳也

とても熱心にご参加いただいた塾生の皆様のお陰で、私自身も新たな気づきが多く得られ楽しく学ぶことができました。ありがとうございました。

リベラルアーツはこころを自由に解き放つ術ですが、そもそも自由というのは他者との関係性において始めて意識されるものであって、他者がいない完全に孤独な状態では自由を意識することさえないでしょう。他者との関係はうまく築けないと生きにくくなる、つまり、不自由が大きくなってしまいます。複雑な社会のなかで多くの人とのいい関係を築くためには、多くの他者と交わり経験を積むことが何より大事だと思います。

過去から培われてきた文化や歴史に触れることは過去の人たちとの対話であり、様々な人の講話を聴き、グループ・ダイアログに参加することは、今を生きる人たちと広く交わる対話です。それぞれ、時間、空間を越えた他者との交わりです。先入観や固定観念を捨て、そこから学ぶことで自由なところが養われるはずで

更に、日本のこころで大事なものは、この他者に人間だけでなく自然が含まれていることでしょう。森羅万象の中のあるがままの自分であるという禅は、単に無垢であるということではなく、時空を超えた対話から学んだうえで改めて本質的なところに立ち返ることによりこころの自由を手に入れるということなのでしょう。

私自身、皆様との時間を過ごしたうえでこのような考えに至ったのだと感じています。これからも皆様と共に学び続けていきたいと思えます。

根本英明

塾生のみなさんの毎回の事前レポートを拝読し、さらにグループ対話で交わされた数々の発言から、一つのテーマで、こんな視点や捉え方があるのだと、学ばせていただきました。

私は今年 65 歳となり、晴れて高齢者の仲間入りをしました。後半の人生は、①日本を築いてきた先人達の想いや事績の探究と普及、②二宮尊徳の報徳思想と浅野総一郎の九転十起の精神に基づく人生や事業の再チャレンジ、地域活性化支援を軸に活動していこうと思っています。

インドの初代首相ネルーは、英国の支配に抵抗し、独立運動で何度も投獄されましたが、獄中から当時 14 歳の一人娘インディラに世界の歴史を講じた 200 通もの手紙を贈り、それが後年、書籍「父が子に語る世界歴史」として結実しました。

偉大なネルーに倣うのは、はなはだおこがましいと思いつつ、3年後の 2025 年に 14 歳となる一人娘に向けて「私流・父が子に語る日本歴史」を書くことも私の夢です。嫌がられるかもしれませんが、今から準備しなく

ては。

栗原康剛

「日本人が日本に対する誇りを持ち、自ら行動・コミットする気概を取り戻し、真摯に日本の課題に向き合い、更には世界共通、先行する課題に取り組み、先送りをせず解決の道筋をつけ、次世代に誇りや夢を持てる基盤を引き継ぎ、そして国際社会に貢献し世界から尊敬される国とする」というのが、Japan Pride イニシアチブの志です。

現在、リベラルアーツへの取組を中核に据えています。なぜならば、日本、そして世界の課題を解決するためには、日本の文化・思想や世界の哲学・思想を習合・応用する必要があり、その学びの場には志のある方々（有志・仲間）が集まるからです。自啓共創塾は、まさにそのような学びの場です。第2期塾生の皆さんの対話から、毎回、私も大いに学ばせて頂きました。第13回「世界に求められる日本型リベラルアーツとは」では、“人材を磨くのがスキル”であり、“人格を磨くのがリベラルアーツ”であるという考え方が見出されたように思います。自啓共創塾の一つの方向性を示しているようです。

Japan Pride イニシアチブでは、リベラルアーツと現代社会の未解決課題を掛け合わせ、リベラルアーツを社会実装する取組を進めています。「リベラルアーツ×技術革新（イノベーション）」「リベラルアーツ×地方創生」「リベラルアーツ×サステナブル」「リベラルアーツ×ウェルビーイング」などがテーマです。第2期生やご協力頂いた関係者を含む自啓共創塾の皆さんのお力やビジョンとの連携が必要となります。皆さんの今後のご活躍を祈念するとともに、皆さんとの交流を継続させて頂ければ幸いに存じます。

一木典子

「日本のこころの源流」を探る「自啓共創塾」の学びは、人に説明しにくいものです。けれど、毎回の学びのあとには、キーとなる「ことば」は深み・奥行き・色合いを帯び、心に「何か大事な感覚」が残ります。毎回異なる切り口から「日本のこころ」の探索を続けていくと、全15回が終わり向かう頃には、多様な視点に通底する「日本のこころ」を日常のいたるところに感じ、その素晴らしさに感動し、自身もそれを受け継ぎ内在させていることに気づかされます。そして、このかけがえのない「日本のこころ」を、自身の日常を通して承継していきたいとの願いが生まれるのです。

このプロセスは、参考図書や話題提供を触媒に、塾生による自調自考と対話があってこそ創発されてくるものです。そのような場をご一緒させて頂いた塾生のみなさま、話題提供の先生方、オブザーバーのみなさま、事務局の仲間に心より感謝申し上げます。

今、私は、「経済大国」だからではなく、「世界のための日本のこころ」を共有し承継してきた日本人というアイデンティティに誇りを感じます。

「日本的靈性」、「習合」、「和」、「間」。これらは決して過去のものではなく、今も源流から湧き続けています。私は、この源流が枯れないよう、自啓共創塾の運営に関わらせて頂くとともに、ときに「遊・楽・美」として、ときに「日本語」を介して、そしていつの日か「道」として、自身の生活の中でも受け継ぎ広げていきたいと 생각합니다。

松本亮太

自啓共創塾も第二期となり、今回も素晴らしい塾生に恵まれ、毎回新鮮な気持ちで参加させていただきました。

た。特に放課後の講師・塾長・塾頭・塾生などが等しく発言をして自由闊達に会話する時間は楽しいものでした。一方、グレンコ・アンドリー氏のウクライナ戦争に関する講演では、世界の現実の厳しさを突き付けられ、「今」をどう生きるべきかを考えさせるものでした。

「自由」は、サンスクリット語の *svayam* の訳語で、自らに由る、独立自尊、何かに依存せずに存在することです。それは個人だけではなく、国にも当てはまることかもしれません。激動の世界情勢の中、自分自身のアイデンティティを再度見つめ直して、日本のところを持ちながら自由にこの世界へ対処する術が求められているように感じております。

柏木満美

第二期の自啓共創塾が無事に終了を迎えようとしている。

始めの頃かなりぎこちなかったグループダイアログや全体セッションも、徐々に皆がなれてきて、川を下る舟に例えるなら、船頭さんが竿を使って漕ぎ出すのではなく、川の自然な流れや風を感じながら、流れ自体を皆で楽しんでいる、後半はそのように視聴しておりました。私自身も皆様のチャットへのご記入内容と発言に何度となく「なるほどー！」と新たな発見や気づきを頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。

皆様とはこれからも卒塾生ネットワークでつながらせて頂き、世界のための日本のところを広く深く周知させていく活動を共にできたらと思っておりますので、よろしく願いいたします。

土居征夫

「学校で算数などを覚える勉強の前に、昔のことを学ぶ面白さに気付く機会があったら良いと思う。今は全くないので子供達の世界は狭くなっている。」これは第一期の塾生だったある高校生のつぶやきで、胸を打たれました。

「我々は何処から来たのか、我々は何者か（今どこにいるのか）、我々は何処へ行くのか」（ポール・ゴーギャン）私達はこの言葉の後半しか学んで来なかったのではないのでしょうか？過去を暗い時代と考え取って目をつむってきたため、我々は今どこにいるかの「アイデンティティ」を見失っていないのでしょうか？

過去の日本人には、父母や祖父母から、地域の祭りや年中行事等から、そして友達との遊びや塾・学校の学びから、日本のところの源流に触れる機会が沢山あったのに、戦後その機会が大きく損なわれたように思います。

過去 2 年間の自啓共創塾の延長線上で、この活動を企業社会や地域社会に広げたいと考えますが、同時に 15 歳以上の親子の世代を対象としたこの塾を「年長てらこや」と位置付けて、15 歳未満のこどもと親の世代を対象とした「年少てらこや」と一緒に、「日本再生てらこや」運動として幅広く展開してはどうかと考えています。大学だけでなく小学の段階から、万人が等しく心を奮い立たせて過去を学ぶことが大事な時代になったと思います。

（今後の世代に期待したいのは、「憤（発憤）せざれば啓せず」の学び、「人生気に感ず」の気持ちです）